

紀下403^ア「とこうで」
 4912^ア
 4,934^ア
 地名(にんぎ)1383^ア(大宰府の西南)
 (粟津)85^ア
 457^ア

紀下400^ア末5^ア

七月二十三日

東西の近江の将、大養連五十君^{いぬかひのむらじりきみ}に(父と子か)

翌日の七月二十三日条に、

男依等、近江の将大養連五十君及び谷直^{あはづのいち}塩手^{しほて}を粟津市に斬る^き。

とある。(紀)

近江国大津の東南にある口、粟津市^{あはづのいち}は、
筑前国大津の東南にある口、二日市^{ふつかりち}は、

月二日に市を立てて交易した^{こうえき}ことにより起る^{おこ}名^な

と、^{いぬかひのむらじりきみ}に相当すると考えられたのであろう^か。

つまり大養連五十君は、筑前国で斬られたように思われる。
ところから下文、大和での戦い^{たたか}において

近江の将大養連五十君が、大和三道のう^{やまとさへどう}ちの口中道^{なかのみち}を南下してきた^き。

と記されている。

近江の将大養連五十君父・子^しが、近江京^{あひみのみや}

(大宰府)と倭国(大和国)とにおいて、
共に、大海人皇子^{おほーあまのみこ}軍と敵対した^{てきたい}。

と解してみたい。

新設 新設 新設 新設

同文 254-3/2 4925

4858-1/2 4935

元 元 元 元

つみ 13行

すなわち

へ壬申年(六七二)の七月二十三日、父大養

連五十君が斬られ、壬申乱後、その息

子が、大養連五十君の名を継いだので、日本書

紀に同一の名で記された

よろと思われ。

察するところ、壬申乱の記述に当って、

「大伴車吹負」佐味君宮那麻呂

連菟」大養連五十君

のよう、まぎらわしい者達が、特に選ば

れて、記載されたのだらう。

口壬申乱の記述中に名を留める武者達以

外にも、輝やか、い武勲をあげた者達が、大勢

いたことは、日本書紀や続日本紀などによっ

て明らかである。(第ハ十五章へ二人の吹負)

そして、日本書紀の編纂者達は、そのよう

な軍功にはあえて目をつぶり、読者の目を

そらすこと、を第一の主眼において、

①大倭国(九州地方)での出来事、

②倭国(近畿地方)での出来事、

の両者の識別が困難となるように工夫した

(*)

どいつ 元958' 自決 命を絶つこと

紀下400' 末4行 427708

4.936^P

主君 1061^P 最期 856^P

紀下400' 注22

大友天皇の自決

さて、天武紀元年七月二十三日条に、こ

記されている。

是に、大友皇子、走げて入らむ所無し。

乃ち還りて山前に隠れて、自ら縊れぬ。時に

左右大臣及び群臣、皆散け亡せぬ。唯し物部

連麻呂、且一二の舎人のみ従へり

是に、大友天皇は、ついに逃げ入るとこ

ろが無く、還って山前に隠れ、自ら首

をくくって死んだ。この時、左右大臣や群臣

はみな散り散りになり、わすかに物部連麻呂

と一、二の舎人だけが従っていた

大友天皇に最期まで忠実であつた物部連麻

呂は、のち物部朝臣、さらに石上朝臣となり

筑紫総領・中納言・大納言・大宰帥・右大臣

等を歴任し、元正天皇の養老元年三月左大臣

正二位にて、七十八歳で没し、従一位を追贈さる。

大友天皇が、何処から何処へ還り、と

H29 (2017) 7.17~28 (9日間)
令和2 (2020) 6.16 (木) ~ 6.17 (金)
H9.5.4 (日)
H5.11.14 (日) ⑥
自決 自らの命を絶つこと。

手記
菟田郡 地名辞 1461
交野郡 " 424

長等山 地名辞 1142
改正

かんろう 508
肝要 非にふること

天つき 改正 4,937

解 釈
二の頁 3行

の地の山前に隠れて益死されたのか
という肝要な点について、詳らかに語ろうと
しない。いろいろの解釈が出来るように、
意識的にあいまいに述べているのであろう。
なお従来から、山前については、
(1) たんなる地形を示す普通名詞とみる説、
(2) 地名とみる説
があつて、次のような説が提示されている。
近江国滋賀郡の長等山 三井寺門前の北約六〇
河内国菟田郡三矢村山崎
河内国交野郡郡門
山城国の山崎 (今、京都府乙訓郡大山崎
などがある。(「日本書紀」(下) 日本古典文学大
系、岩波書店、五八九頁補注二八一三〇参
照)
「かしの物語では、
大友天皇は、大宰府からあまり遠くない
所で自決されたのであろう」
と解説ことにしたい。

新8行

てころを 27138を
手頃 1525 小千調 812

1000ギキ
龍 駿
手

紀下396¹¹⁹⁷
同又^{OK}
⑤4897¹¹⁹⁷ 紀下396¹¹⁹⁷
市 4925¹¹⁹⁷ 4938¹¹⁹⁷ - 1/3

あらし 大
拳兵 587¹¹⁹⁷

2012

881¹¹⁹⁷

④4893¹¹⁹⁷

やまとのくに

倭国

(大和国)

方面

での戦い

七月一日

それでは

倭国

(大和国)

および

で

の戦い

について

その

あらま

を述べて

みる

ことに

よう

以下

519

520

図

(1) 先に述べたとおり

大海人皇子の拳兵

(六

月二十二日)

から七日後の

六月二十九日に

三輪君高市麻呂

・鴨君蝦夷等

か、

將軍吹負

(高

(高市の御行)

の旗の下に

集結した。

(2) そして

翌日の七月一日

將軍吹負

(高

市の御行)

らは北を

目指し

乃檠

(奈良市)

へと向かった。

さてその日

(七月一日)

吹負

(高市の御

行) かの檠へ

軍を進め

、

稗田

(奈良県

大和郡山

稗田所)

に至ったとき

、

軍勢が

やってま

います

と知らせる者があつた。

小手調

べとして

戦つて

みるのに

丁度

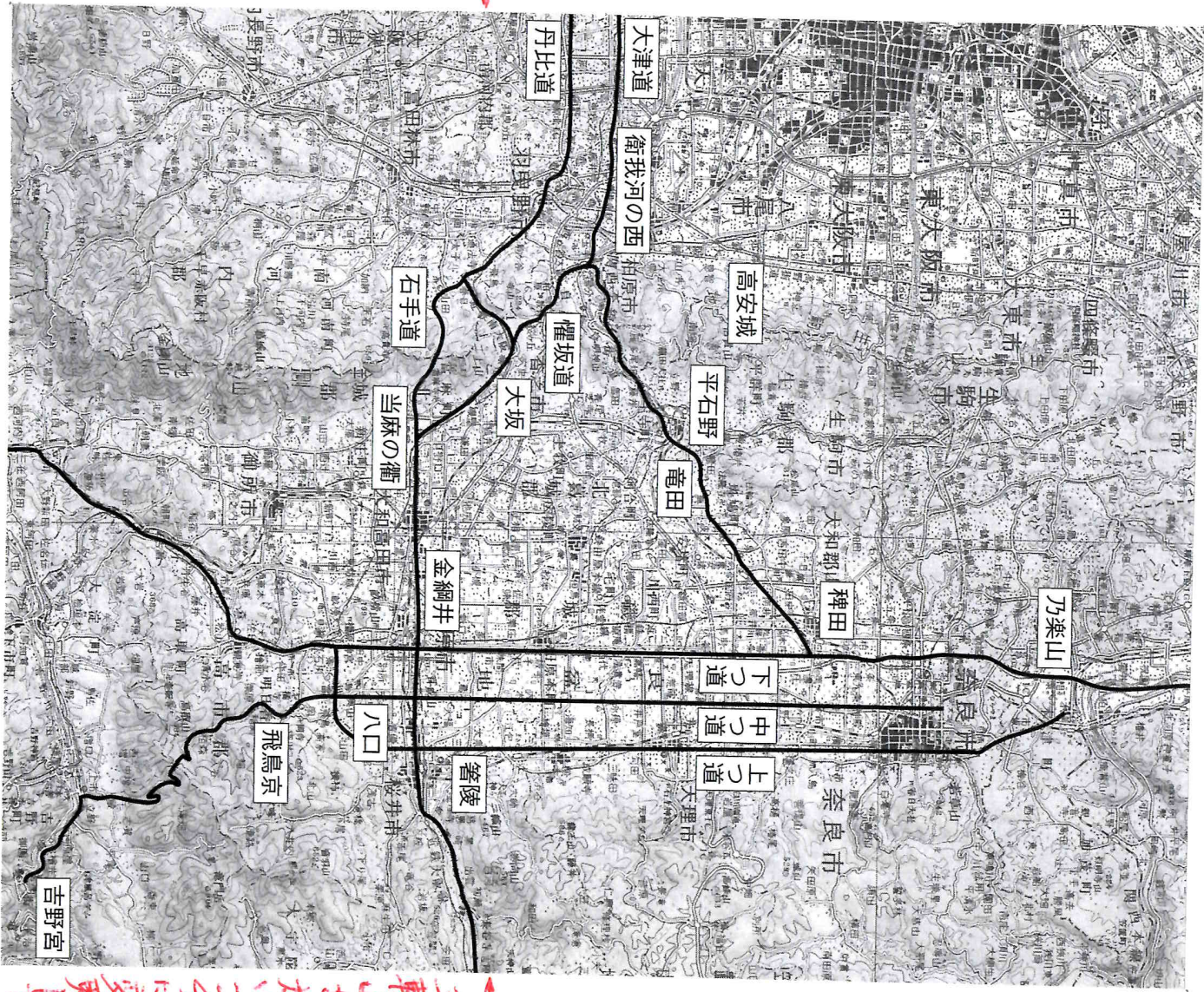
、

手

・右頁全図。限度一杯お出し掲載下さい。

4,938^P-2/3

↑三上山を太いゴチに変更
お願います。



↑三輪山を太いゴチに変更
下さい。

13a9

14a9

第519図

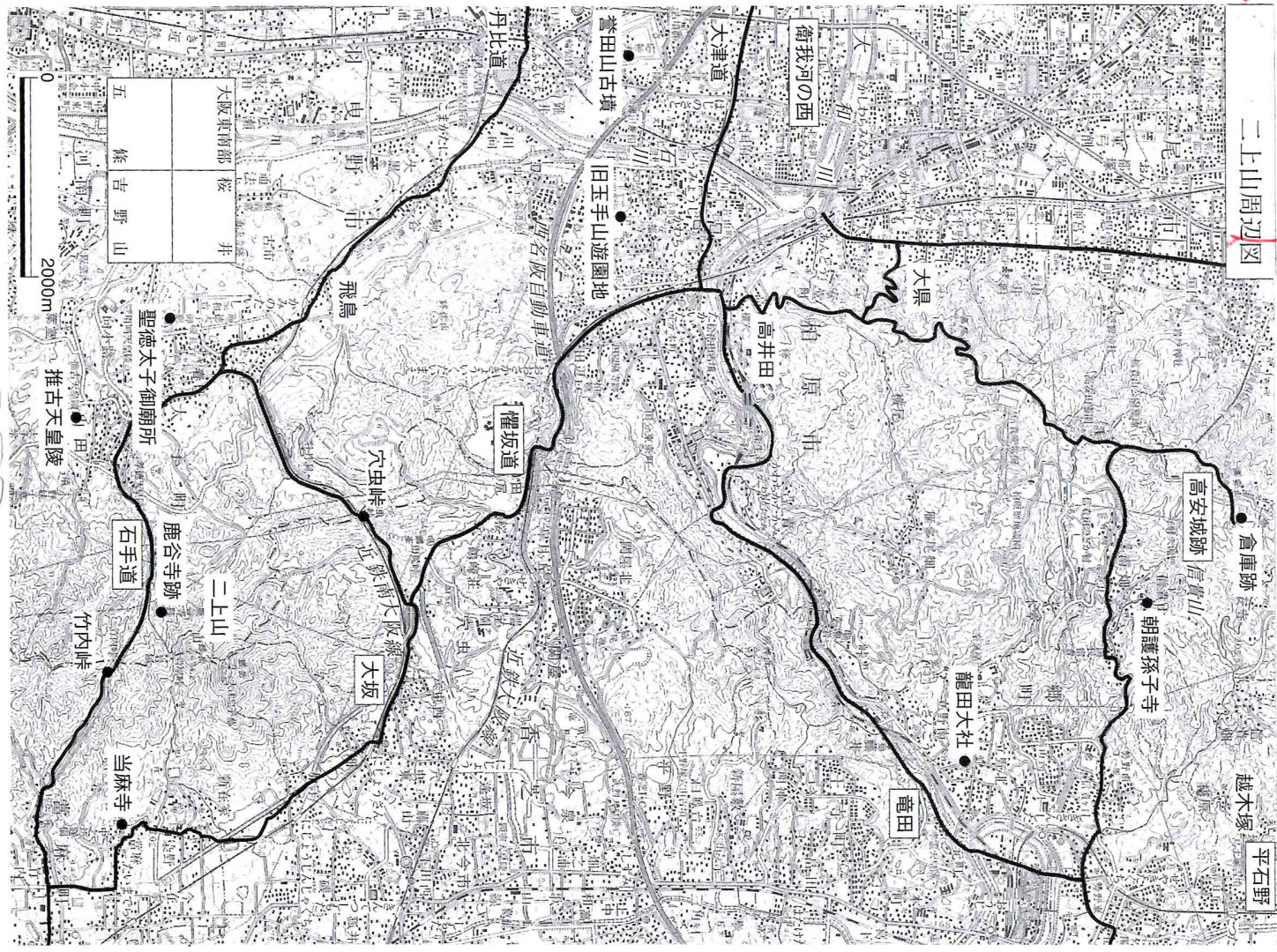
大和・河内戦線図

歴史の旅『壬申の乱を歩く』倉本一宏、吉川弘文館、2007年7月10発行、89頁参照

・左頁全面。履歴一杯お出しで掲載下さい。
細川線で囲って下さい。

拡大

二上山周辺図



→ 淀川を濃いコチに変更して下さい

4.938⁷ 3/3

13a4

14a4

第520回

ふたかや

二上山周辺拡大図

歴史の旅『壬申の乱を歩く』倉本一宏、吉川弘文館、2007年7月1日発行、101頁参照

HS.11.15 (月) 記下4011230
 49503 2290
 4890 209 489 99

はひ 小林 986
 配 人 を 配 17 部 に 属 する。
 4.939

平成元 3/15 (日) 14 1021
 13 天・注 月
 王 規 軍 12/17

頃な相手のようであつた。
 なお、弱小な吹負（高市の御行）の軍が、
 挑んでも、まったく勝負になうない。は明
 白だ。第一、この時侯では、
 勝ち負けなど論外である。
 ・ただ、近江軍の耳目を集め、天智上皇の注
 意を倭国（大和国）の方へ引きつけておくこ
 とが、肝要なのであつた。

ここに、吹負（高市の御行）は、三ヶ所に
 兵を配備した。
 則ち、
 山坂本臣財・長尾直真墨・倉場直麻呂・民直
 小鮪・谷直根麻呂に、三百の兵を率いさせ、
 龍田（大和国から河内国に通じる交通の要衝
 の地）を守らせた。
 佐味君少麻呂に、数百人を率いさせ、大坂
 （奈良県北葛城郡香芝町逢坂）に駐屯させた。

なお、先に述べたが、二上山の北を河内へ抜ける穴虫越え

やゆう 夜 2219⁹ 紀下367⁹ 紀下401⁹ 紀下366⁹ 4562⁹ 4,940⁹ 4890⁹ 4939⁹ 4890⁹ 紀下394⁹ 末5⁹

第511 520 4708 34 4938 3/3 734 4708 34 高安山 参照

(一) 昨日の六月二十九日 (己丑) に、
 大倭国での戦勝を大海人皇子に報告
 する為、不破宮へ出発した。
 という日 佐味君宿那麻呂と、
 (二) その翌日の七月一日 (庚寅) に、
 大和国の大坂に駐屯した。
 という日 佐味君少麻呂とは、
 別人であらう、と思われぬ。
 ・たぶん、父・子なのであらう。
 国鴨君蝦夷に、数百人を率いさせ、石手道
 (二上山) の南を河内に抜ける竹ノ内峠かとい
 うを牢らせた。
 是の日 (七月一日) の夜。坂本臣財らは平
 石野 (所在未詳。大和国襲田付近) に夜営し
 たが、近江 (天智上皇) の軍が高安城 (奈良
 県生駒郡と大阪府八尾市との境) 四ハハ (11
 にいるとの知らせを聞き、山に登った。
 ・倭国 (大和国) のこの高安城は、天智六年
 (六六七) 十一月に築かれた山城である。(既
 述)

高安城の近江軍は、財らが夜襲を仕掛けて

④4708 野田を収めた
→

④5037 大津(大阪府南部)に無
美原町は、海に面する
紀下403 紀下美原町

たそ ④4938 179
紀下402 24

④4950 24
4,941

紀下402 34
②

またと知るや、税倉にこごとく火を放
ち、みなげうせてしまった。
そこで、財らは、城の中で夜を明かした。

七月二日

盟 七月二日の明けがた、西の方を見、霽かすと
大津(大阪府堺市から、東方南河内郡美陵町に
至る)いぬゆる長尾街道か。・丹比(堺市から
東方羽曳野市古市に至る)竹内街道か)の二つ

の道からやて来る多くの軍勢が見えて来るのが見
え、旗はる。もは、きり見て取れた。

誰かが、こう言った。
「近江の将壹伎史韓國の軍勢だ。」

財らは高安城から山道を降り、備我河(大阪
府柏原市下大和川合流矢付近の石川)を渡り

・いか、財らの軍兵は少なく、韓国の軍を防

ぐことが出来なかった。

これよりさき、紀臣大音が懼坂道(未詳)。

大坂と龍田の中間の峠か)を守るために派遣

169 知らせたり
開くや
ちからくら
④4962 1/3
84
紀下401
54
ちからくら

4942^カ

ふは。み
不破宮

かこの坂
紀下402^カ ④ 4945

紀下402^カ 5^カ

さ、水でいたので、財らは懼坂に退き、紀臣大
音の軍営に入つた。
● このころ、河内国司宇来目臣塩籠は、
宮（大海人皇子）に帰順しようと思ひ、軍
卒を集めていた。
● 予に韓国は到つてはかりこことを漏小聞
き、塩籠を殺そうとした。
● 塩籠は、ことか（近江方）に洩れたとを
知り、自殺した。

*

45.11.16 (火) ⑥
17

おこ 紀下394P 15行 390' 9行
⑤ 4924P 402' 44行
最上 4,943P

主のつげき
奇襲攻撃

おこ 紀下402' 8行へ
大勢 276P
はつらる 敗走 1763P

七月四日

吹負（高市の御行）
墨坂へ敗走す

なか一日おいた七月四日

諸の道から（大和国めざりて）大勢やつてきた。

吹負（高市の御行）らか、七月一日の夜に高

安城を奪い取り、そして七月二日に近江の将

壹伎史韓國の軍列に向かつて奇襲攻撃を行な

た

というたか、天智上皇の耳に入ったからな

のであろう。

吹負（高市の御行）の軍衆か、いかに少な

うとも、こゝを黙って見返す訳にはゆかない。

そこで天智上皇は、この日（七月四日）軍

を發して、北や西の諸の道から倭国（大和国）

へ向かひせになつたのであろうと思ひこ

とて来る者もなく、その大軍と相戦うことな

行（うらは）軍を解き退いた。

是の日（七月四日）、近江方に敗れた將軍

紀下398P
④4911P
324P
紀下402P 10行へ

4,944P

天つき
改行

吹負（高市の御行）は、わが一人二人の騎
馬兵をつれて遁走し、墨坂（三輪山あたり）
に逮った。
それでは、吹負（高市の御行）は、へ何処
から遁走して墨坂に至ったのであろうか。
日本書紀の執筆者は、
・最初の七月四日条において、吹負は、近
江の将大野君果安と乃樂山で戦い、敗れて（吉
京へ）逃げたように述べている。
・そして、最初の七月四日条と、二度目の七
月四日条とを、合せて読む読者に、
へ吹負が乃樂に向かい、乃樂に至っ
た時、近江の軍兵が諸の道から大勢やつてき
た。吹負は、近江の将大野君果安に敗れて、
乃樂から墨坂へ逃げ、さらに飛鳥へ逃げた
と解釈させようと務めている。
なるほど、一見、
へにわが仕立てのささやかな軍を二手に分け
將軍吹負は自ら信軍して乃樂へ向かい、残りの
軍兵を河内から来る近江の軍に立ち向わせた
ように見える。

ーかしなから、

新2頁19行

か12の26 494 未
懼坂 4942 1行

か12の26 4942 1行

4941 未か12の26

4945

へ大和国の將軍吹負ふけひ（高市の御行みこう）は、乃
樂で敗れ、墨坂すみさかを経て、飛鳥あすかへ逃げた✓
わけではあるまい

あるいは、
へ將軍吹負ふけひ（高市の御行みこう）は、大阪府と奈
良集なよろの境あたり、
遁走とんそうし、墨坂すみさか（三輪山みづはなあたり）に速すみつ

た✓
のかも知れない。

また、弱小な吹負ふけひ（高市の御行みこう）の軍が、

一つの軍と一まゝとまゝ、おれは非常に危険
であり、いっきに潰滅かいめつする恐れもある。そ
こで軍を解き、皆がバラバラになつて逃げ散
つた、ように推察される。

*

4952 18 4955 19 おろく
佐野那那
4890 4922

紀740 119

4946

基振 119 紀740 203 思惑 330 4922 二人の足留め
足留め 35 執拗 994 4948 紀740 28

菟の軍

思惑通り 大勢の近江(天智上皇)の軍

か倭国(大和国)へやってきた。

とばかりにほくそ笑んだ

出沒し、執拗に攻撃を繰り返して下

軍勢を甚振り、長期間

是の日(七月四日)、墨坂(三輪山あたり)

遇 菟の軍がやって来るのに出会った。

七月九日 東道將軍紀臣阿閉麻呂が急に

是の日(七月四日)、吹負が墨坂で遇出

別人(恐らく父と子)なのだろう、と思わ

H30(2018)11.16(金)~11.17(4回) H31(2019)4.19(金)~4.20(3回)

H9.5.7(水)
H5.11.17(金)

FF 1/6
1/6

こ

F420
4/19

4,947^P

金4959^P

はしのはか
著 後

紀F 404^P 25^P

れる。

もつとも「菟」には、「東」の意味がある。

あるいは「菟」の軍とは、「東」からやってき

た軍」という意味かも知れないが、

かしこの物語では、とりあえか「菟」を人名

と考えた。

参考迄に予め述べると、後文に、

「是の日(七月四日以後の某日)」

君高市麻呂・置始連菟上道に当りて、
三輪
はしのはか
著 後

のもとは戦ふ。云々

とある。

二度目の七月四日条の「菟」といふことに記

されていゝ。置始連菟とは、同一人物なの

であろう。

將軍吹負(高市の御行)は、「菟」の軍が

馳せ参りてくれたことを、大いに喜んだに違

いない。

*

墨坂で遇出会った菟

こ

かみえ
攪乱 309P

4,948P

執協 994P
4946P 快

紀下 402P 25妙 159P
1721元 990'

金細井の本堂
かなづなのみ ほんえい

日付不明

こっちの方からと思えは、またあちらからといったであ
い、追って追ってもしつこく驚いかり、す
ぐに山中へ隠れ、吹負へ高市の御行一らの存
在は、確かに目ざわりではあつた。
一か一日経つうち、取りたてて問題とす

へき相手ではないように思えてきた。

天下を奪おう

などといった大それた野望はないようであり

ちよつと一英雄気取りで攪乱一ているよう

に見受けられ

とりあえぬ、軍を縮少し、様子を見て

みることはよう

こうして、近江(天智上皇)の大軍は、朝

か引くように北の方へと還つていった。

それは困る

由4953¹⁸ 吹置の軍旗が八ノボとひさかた
紀下396⁸ 行へ

由4954¹⁸ 八ノボ元
翻 2006 金網井 紀下402¹⁶ 江16

4.949¹⁸ 行へ

次頁から

なんと一でも、近江軍を倭国（大和国）
へ呼び戻さなければならぬ。
そこで將軍吹置（高市の御行）は、元の
所へ更に還って、金網井（所在未詳。今の
奈良県橿原市今井町付近かという）に駐屯し
散り散りになつてゐた兵士を召集した。
ここのところ、
「更還屯金網井、而招聚散卒」
と記されてゐる。（紀）
つまり、
へこの頃、金網井周辺に、奈良盆地南半部
つた
ことかうかかえる。と解される。
ともあれ、將軍吹置（高市の御行）の所在
を示す為、軍旗が高々とかかげられ、
周囲の山中から、同じ志を持つ者達が再び集ま
つてきたのであろう。

ふみ
志 2290°

4,950°

壬申4806272
大和の国由4938°下403注8
4970°

紀下401° 紀下402°3分
4939°20' 注32
4941°

前頁

是に、近江の軍 七月二日に衛我河の西に

葛城郡香芝町逢坂より（奈良盆地内に）至つ

ている、と聞き、將軍吹負（高

市の御行）は軍を率いて西に進み、当麻（奈

良県北葛城郡当麻村）の衛（今水道）に到り

壹伎史韓國の軍と葦池（所在未詳）のほと

りで戦った。

このとき、来目という名の勇士があり、刀
を抜いて馬を馳せ、まっぐらに敵陣へ突入
した。騎兵がすぐこれに続いた。そして遁走
する近江の軍を追って、多くの兵士を斬つ
た。

一かきながら、それは將軍吹負（高市の御
行）の嘉するところではなかった。

將軍吹負（高市の御行）は、軍中に命令し
て、こう言った。

大阪府柏原市石川

4941 15分

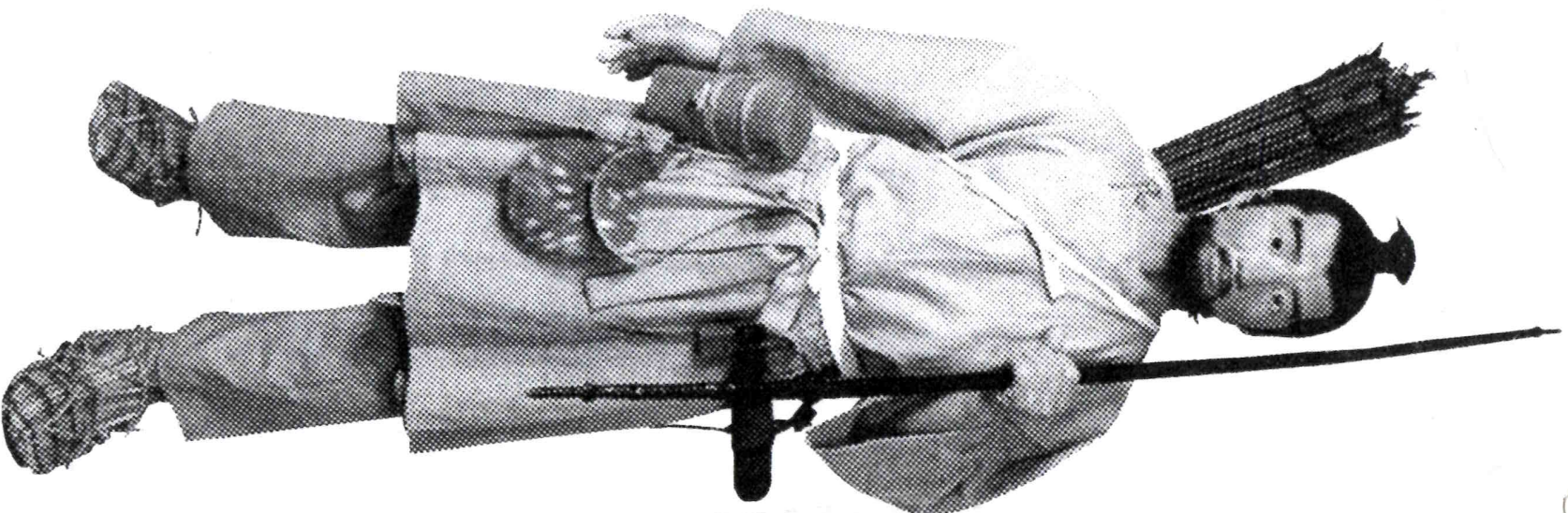
4,951^P - 1/2

軍田 66^P 正規軍 121^P
軍隊 68^P 傭兵 227^P
(軍の田) 雇兵

この戦いは、もともと百姓（傭兵）達を
殺すために始めたのではない。元凶（と）なっ
て（る人）の爲に兵を死（おこ）したのである。みだり
に兵らを殺してはならぬ。
（すなわち）
● 壹伎史韓國の軍は、
兵としての訓練を受けた軍隊でなく、その
多くが百姓達からなる雇兵の軍田であつたこ
とが分かる。（写真因版 75へ農民兵）（参照）
● 是に、韓國は戦場を離れ、ひとりで逃げ出
した。これを遙かに見た將軍は、来（き）目に命
（めい）に矢（や）を射（い）させた。―か―あたらす、韓國は
ついに免（か）れて走り去つた。
● 勇士（ゆうし）来（き）目は、きわどくも韓國に触（ふ）れるは
かりの矢（や）を射（い）て、―わざと逃（に）が―たの
も知（し）れない。ではなからうか？
● つまり將軍（ふけひ）（高（たけ）市（し）の御（み）行（こう））は、勇士（ゆうし）来（き）
目（め）に命（めい）として、あえて韓國に命（めい）中（ちゆう）しなうよう
に矢（や）を射（い）させ、―ほうほうのていで免（か）れ
た韓國（かんこく）がうち震（ふる）えなから天（てん）智（ち）上（じやう）皇（わう）に報（ほう）告（こ）する

・ 頁の左上に、
 限定一杯大きく
 掲載下さい。
 ・ 背景のヨコギ
 トル。

4,951^P - 2/2



1404

写真図版 765 農民兵

「槍」を持っている。

1204

写真中に
 写こえていた
 ところ。

1304

戦争の日本史 2 『壬申の乱』 倉本一宏 吉川弘文館 2007年3月10日 第2刷
 発行 215頁 発行所

金紙井 4949
たぶん次々頁6行

4,952

5.19

紀下402
紀下403

よう、^ト仕向けたのであろう、と想像される。
■なお、本来なら
へそ人な^{から}に重大な任務を帯びていたとも思
えない^{から}韓国に下矢^ヤが中^{あた}らなかった
という^{こと}など、国史に記される筈^{はず}がない^些事^{こと}である。
■へそ水^{みづ}なのに、何故^{なぜ}ここに記載^{きざい}されている
の^だらうか✓
と思^いいめぐら^してみる時、
矢^やが、^{から}韓国^{こく}に中^{あた}らなかつた^た。
という事^{こと}にこそ、大きな意味^{いみ}がある^たのであろ
う、と定^{さだ}かならない^{こと}ながら推^{おし}測^{そく}される。
■その後^{のち}將軍^{しん}政^{せい}員^{いん}（高市^{たけち}の御行^{みぎょう}）は、また本
宮^{みや}に還^{かえ}った。
・なお、^{やまとの}倭国^{やまとくに}（大和^{たいわ}国^{こく}）の政^{せい}員^{いん}（高市^{たけち}の御行^{みぎょう}）
の本^{ほん}宮^{みや}は、飛鳥^{あすか}の古京^{ふるみや}にあつたわけではある
まい。
井^いの^{こと}な^{のだらう}、と思^いわれる。
さあ、もう一度^{いちど}かか^つて来^きるかよい^い。

令和元(2019)10.13(月)～10.14(3回)

H9.5.7(木)

H5.11.18(土)⑤

ト

ト 1/4
10/13

4,953^P

④4949^P14行 坂夏の軍勢が露白となり、

■将軍坂員(高市の御行)の軍勢が、これ
よかしに翻とひるかえったに違いない。
■天智上皇の軍がこのまま黙認しているわけ
はなく、猛攻撃が予想された。

*

紀下303*1号

あつ 五
伺う 176P
こと

紀下390P
平元3/4生 2/4生 4生 12/4
→ 改訂

4,954P

紀下403P
427706

東の師頻に多に至る

さて、それが何時だったのか、日本書紀から伺い知ることには出来ない。

しかし、たぶん七月半ば頃の或る日の出来事だったのであろう。

倭国（大和国）の將軍吹負（高市の御行）らが長らくの間待ち続けてきた大援軍、東の師の先鋒隊が、ついに西の方から到着した。

先頭集団

去る六月二十六日、天照太神を望拝し

た後、大海人皇子が東方へ遣わしになった。

山陽道・山陰道のうち山陽道であろう。の軍が、駆けつけて、とうとう倭国（大

和国）に着いた、と解したい。

このところ、日本書紀には、

時に東の師、頻に多に臻る。則ち軍を分

りて、各上中下の道に当てて屯む。唯し將軍

と記されてゐる。

あ4949
857

次巻6
4946 P 219

紀下390 P 94
4,955 P

夫らんく
へ、東の師（基点九州）から見、東方へ
駆け向った軍勢は、整然と隊列を組んで
田々となつてやつてきたのでなく、
続々と、頻にやつてきた。と
いう意味なのであろう。
宇佐国から大和国までの約七〇〇
里を疾駆する間に、おのずと、早い厚い
か出て、長い長い長蛇のような隊列となり、
先頭の者達に引き続いて、次から次へ頻に
多수가臻った、というところのように想像さ
る。
宇佐国を出発した稚桜部臣五百瀬・土師連
馬手の軍勢は、途中、近江軍（天智上皇軍）と
遭遇することなく大和国に着いたのであろうが
一か一う水にても、夏の暑い盛りに、人も
馬も連日よく駆けたものである。
一、大和天皇の皇子の拳兵に踏み切られたこ
とを信じて、倭国（大和国）で果敢に戦って
きた將軍吹負、
連御行）は、大海人皇子が実に首尾よく戦い

紀下 531^P 紀下 387^P 冠座 紀下 622^P 紀下 592^P 紀下 488^P
 584^P ④ 4859^P 感喜 成 1-7 喜 示
 ④ 4860^P 大 柜 ④ 4862^P 大 件 ④ 4859^P

喜を感ずるにあらざることを聞き、
 大伴氏を命運をかけた
 大伴氏の大伴連御行は、
 天武十三年宿禰姓とな
 り、大伴元年正月大納言正
 広参りて没、正広
 式右大臣を追贈さるる。
 (既述)
 大海人皇子が東国に向か
 われた時、元
 年朝臣姓となり、持統十
 年九月没、元から従
 った功へ元従之功によつ
 て直大壹位を追贈
 さるることとなる。
 ③また、大海人皇子が東
 国に向かう途中、菟
 田の吾城に到った時、食
 事を供った土師連馬
 手は、天武十三年宿禰姓
 となり、和銅四年二
 月従四位下にて没する。
 *稚桜部臣五百瀬および
 土師連馬手は、壬申
 の最初から(最初近くか
 ら)従つていた。
 東山乃(山陽道)を
 駆け抜け、迅速に大和国
 に達して奮戦したから、
 その功を重くみられたの
 であらうと推察される。

次頁 9 行
に 違ひ 有

紀下403⁰
259

瓶 11 斤

熱傷子丸

コクヨ ケー20 20×20

48153 帶初級紙卡 = 20/4 48151 行

紀下38の4頁

214

44

距下 381°/5A

紀下622P
土師尊 稚持郎

冠に元下622P 4860P
佐紀白D-1P 古本
紀622P 古本

4.957P-1/2

元下387P
元下390P

紀下390' 387P
紀下390' 387P
紀下390' 387P

本書紀(下)日本古典文学大系、岩波書店、六

直大壹・從四位下・直広肆の順である。(日

伍階の高川方からいえば、正広式・正広参

とある。

勤大貳山代小田に直広肆を贈る

続紀、文武二年十二月条に、

軍功は、やや小さくみられたのかも知れない

から従っていったのだが、山背部小田の

桜部臣五百瀬らと共に、山背部小田もまた元

大海人皇子が東国へ向かわれた時、稚

・しかし、何事も起こらなかった。

・そう考えて、一戦を覚悟し、船団を東へ東

へと移していったに違いない。

・皇軍は、恐らく瀬戸内海を西下して来るで

あろう。

・関門海峡が封鎖されたことを知った天智上

には、どのような処遇がなされたのだろうか。

・東方へ漕ぎ進んだ山背部小田・安斗連阿加布

④ それでは、東海(瀬戸内海)を通過して

紀下390' 387P
東海

山背部小田

4,957^P-3/2 (ニ)

二二頁へ表十一、冠位・位階制の変遷へ参

(照)

たかつて

① 大伴連御行、正広参にて没。正広式右大臣

を追贈。

② 稚井部臣五百瀬、直大壹を追贈。

③ 土師連馬手、従四位下にて没。

④ 山背部小田、直広肆を追贈。

の順であつたことが分かる。

*